

第 5 部

異文化研究

第5部 異文化研究

第1章 スーパーグローバルクラス（SGC）

第1節 高校2年（SGC3期生） 異文化研究 I

タイ・フィールドワーク

- 日時：2018年7月4日（水）～18日（水）
- 場所：タイ王国（チェンマイ県・チェンライ県・カンチャナブリ県・首都バンコク）
- 生徒（人数）：2年A組（SG）10名
- 引率教員：片桐正雄（全日程）・出射見奈子（7月12日～18日）
- サポート：押山正紀（恵泉女学園大学）（7月4日～12日）

研修目的	外国を訪れ、異なる文化の生活を体験し、現地で起こっているさまざまな社会問題を肌で感じグローバルな視野を体得させる。 ① 日本とは異なる文化を体験する。 ② タイの山岳民族やスラムの暮らしを体験的に学び、問題意識を深める。 ③ NGO・NPO施設を訪問し、問題解決のための取り組みについて学ぶ。
事前学習	① 文献講読：堀芳枝・波多真友子（2016）『タイで学んだ女子大生たち』コモンズ 文献講読：岡本尚也『課題研究メソッド』啓林館 ② 講演会Ⅰ「北タイのカレン族について」（恵泉女学園大学押山正紀先生） 講演会Ⅱ「タイのスラム街について」（デザイナー藤田哲平氏） ③ 恵泉女学園大学訪問（タイフィールドスタディー報告会参加） ④ JICA地球ひろば訪問（SDGs事前研究） ⑤ ワークショップ：Global Village for Students（日本に留学している外国人留学生とタイの社会的諸問題についてディスカッションを行う） ⑥ 映画鑑賞：「戦場にかける橋」（泰緬鉄道の歴史を知る）
事前説明会	第1回タイ・フィールドワーク保護者説明会（4月28日・土） 緊急医療同意書・海外旅行傷害保険・外貨両替案内・健康に関する質問書 ・予防接種案内・行程確認等の書類を配布。 第2回タイ・フィールドワーク最終保護者説明会（6月23日・土） 保険証書・外貨配布（希望者）・旅行ハンドブック「しおり」・渡航に関する誓約書 ・出発までの予定等の書類を配布。バンコクの情勢についての説明。
報告事項	本校のスーパーグローバルクラスでは、学校設定科目として「国際文化」と「特設英語」の2つの科目を週2単位ずつ設定し、それによって2つの海外研修プログラム、すなわち高校2年次の「タイ・フィールドワーク」および高校3年次の「ロンドン大学SOAS校研修」に向けた準備を行っている。特に高校2年次の「国際文化」では、タイにおける様々な社会問題を文献や講演を通して学び、生徒自身でどのような研究テーマを設定するのか、事前に決め現地に向かう。今年度、本校3回

	目となるタイ・フィールドワークでは、昨年、一昨年と実施した反省をふまえ、部分的な変更・改良を行い、より充実したプログラムになるよう計画を立てて実施した。
--	--

プログラム行程

日付	訪問地・内容	宿泊施設	都市
7月4日 (水)	羽田空港発→バンコク（スワンナプーム空港）着 バンコク発→チェンマイ空港着→チェンマイ大学	チェンマイ大学 ユニサーブ寮	東京→バンコク→ チェンマイ
7月5日 (木)	チェンマイ大学語学センターでタイ語研修 NGO 施設ニューライフセンター訪問 NGO 施設 M プラス財団訪問	チェンマイ大学 ユニサーブ寮	チェンマイ
7月6日 (金)	現地校レジナシェリーカレッジ女子校訪問 (歓迎式典・現地生徒へのインタビュー・交流会 ・キャンパスツアー)	レジナカレッジ生徒の家庭 ホームステイ	チェンマイ
7月8日 (土)	NGO 施設 FEDRA 訪問 NGO 施設アーサーパタナディック財団訪問 旧市街ナイトバザール散策	チェンマイ大学 ユニサーブ寮	チェンマイ
7月8日 (日)	チェンマイ出発→カレン族ヒンラートナイ村訪問 カレン族の家庭にホームステイ	カレン族の民家 ホームステイ	チェンマイ→ ヒンラートナイ村
7月9日 (月)	カレン族の村人たちとともに農作業	カレン族の民家 ホームステイ	ヒンラートナイ村
7月10日 (火)	ヒンラートナイ村出発→パンラオ村（昼食） →チェンライ市内へ 山岳民族博物館見学 チェンライ・ナイトバザール見学	ワンカムホテル	ヒンラートナイ村 →チェンライ
7月11日 (水)	メーサイ国境・ミャンマー入国 →ゴールデントライアングル見学	ワンカムホテル	チェンライ
7月12日 (木)	チェンライ空港発→バンコク空港着 →立正校成会バンコク教会（南アジア国際伝道センター）にて前半の振り返り	南アジア国際伝道センター	チェンライ→ バンコク
7月13日 (金)	在タイ日本大使館訪問（講演） →WAFCAT 事務局訪問（講演）→ ワットダムサムローン小学校特殊学級児童達交 →車椅子の提供	ツインタワー ホテル	バンコク
7月14日 (土)	カンチャナブリ連合国軍共同墓地・泰緬鉄道乗車 →NGO 施設プラティープ財団「生きなおしの学校」訪問	生きなおしの学校	バンコク →カンチャナブリ
7月15日 (日)	「生きなおしの学校」交流 →アジアンティーク（夕食）	ツインタワー ホテル	カンチャナブリ →バンコク
7月16日 (月)	NGO 施設プラティープ財団訪問（講演）→クロ ントイ・スラム街見学・「付属幼稚園」交流訪問 →アユタヤ遺跡見学	ツインタワー ホテル	バンコク
7月17日 (火)	国連 ILO（国際労働機関）訪問（講演） バンコク市内（王宮）観光 ホテルにてタイ・フィールドワークの総括	ツインタワー ホテル	バンコク
7月18日 (水)	バンコク空港発→羽田空港着		バンコク→東京



NGO「M プラス財団」での講義



チェンマイのレジナシェリーカレッジ訪問・歓迎式



NGO「アーサーバタナディック財団」訪問



チェンマイのレジナシェリーカレッジ訪問・歓迎式



NGO「WAFCAT」の車椅子贈呈の現場にて



カレン族(ヒンラートナイ村)での農業体験

- ・ドゥアン・プラティープ財団 (Duang Prateep Foundation)
日本語公式 HP (<http://www.dpf.or.th/jp/>)

プラティープ・ウンソンタム・秦氏が設立したスラム支援の NGO 団体。プラティープ氏は、1978 年に「アジアのノーベル賞」と言われるラモン・マグサイサイ賞（社会福祉部門）を受賞し、その報奨金でこの財団を設立した。最初は、スラムの子供たちに教育の機会を与えることを目的としてスタートした。現在では、子供たちへの読み聞かせ教育としての「おはなしキャラバン」、教育奨学金の支給、ドゥアン・プラティープ幼稚園の経営、「クロントイ信用組合」の設立、ストリートチルドレンや麻薬に手を出してしまった子供たちの更生を目指す「生き直しの学校」による「ニューライフプロジェクト」など、数多くの活動を行っている。

今回の訪問では、直接プラティープ氏からお話をうかがうことが出来た。バンコク最大のスラムであるクロントイ・スラムが、どのような経緯で誕生したのかということから始まり、プラティープ氏が教育の重要性を自覚し、スラムの子供たちのための「1 日 1 バーツ学校」を設立したこと、その後様々な取り組みによってスラムの環境改善を行ってきたことを説明していただいた。

また、財団の方の先導で、実際にクロントイ・スラムの中を 20 分ほど歩き回った。生活ゴミが放置され悪臭が漂う中、蒸し暑く住宅が密集しているために風通しも悪い、非常に狭い通路を歩き続けたことで、生徒たちはスラムの劣悪な環境を実感したようだった。しかしながら、このツアーの後に、現状でもかなり環境が改善されてきているというお話を財団の方から伺い、自分たちが普段暮らしている環境とは程遠い状況に驚いている様子だった。



プラティープ先生から説明を受ける



スラム街を歩く

・ILO 国際労働機関 アジア太平洋地域総局 (International Labour Organization in Asia and Pacific) 公式 HP (<http://www.ilo.org/asia/lang--en/index.htm>)

国際労働機関 (ILO) は、1919 年に設立され、1946 年に国際連合の最初の専門機関となった組織である。労働や生活条件改善のための国際的な政策やプログラムを策定し、国際労働基準を設定している。訪問したバンコクのオフィスは、特にアジア太平洋地域の中心的機関である。訪問に関しては、第 1 回タイ・フィールドワークの時より、元国連広報官である上智大学総合グローバル学部教授の植木安弘先生ならびに上智大学グローバル教育センター特任教授の浦元義照先生にご尽力いただいた。

今回の生徒の訪問に際しては ILO アジア太平洋総局チーフアドバイザー須藤祥様より、ILO 概略および ILO を通じたアジア地域での日本の貢献についてお話を頂き、同技術オフィサー敦賀哲平様より、アジア地域での社会保障に関わる取り組みについて、ご講義を頂いた。生徒たちは積極的に研究テーマに関することだけでなく、さまざまな質問をして情報を収集していた。



ILO での講義



ILO 内の施設見学



生徒代表による挨拶

生徒アンケート

(タイ・フィールドワーク「SEAS 学校行事評価システム」アンケート結果の自由記述欄より)

・カレン族の村の滞在が最も満足している。今の東京での生活では体験できないようなことを2泊3日で経験し、自分の見方が変わった。・他民族の文化やタイの文化が体験できた。・虐待を過去に受けた子供と関わったが、想像していたよりもとても明るい表情でびっくりした。・カレン族の村では、私達の普段の生活と比べたら不便なはずなのに、少し不便な位が人間には適していることに気づけた。また、「自然が多い所は人間を豊かにする」意味を理解できた。・カレン族が印象的だった。不便なのに幸せでとても不思議な気分になった。・得にカレン族の生活が自分達の生活とはまったく違って、新鮮で印象に残っている。・生きなおしの学校がとても印象的だった。・カレン族が一番印象に残っている。LINEを交換し、タイのことなどたくさん聞くことが出来てよかった。・カレン族では特に生活の違いがあって、印象に残った。すごく楽しくて一生の思い出に残る活動だった。・とても楽しかった。

成 果

過去2回にわたり本校では、上記「生徒アンケート」欄で既出した SEAS (School Events Analyzing System) 「学校行事評価システム」を利用し、その年度のタイ・フィールドワークの主な項目を全国平均との比較・本校数値との過年度比較を行っている。

まず、①行事(タイ・フィールドワーク)に対する「満足度」の数値は本校 5.00(満点は 5.0、全国平均 4.28、昨年度の本校 5.00)で、昨年度に続き参加生徒全員の満足度は最高値を示した。②行事に対する「取り組み姿勢」の数値は本校 4.90(同、4.20、5.00)と、極めて高い数値となった。その数値が表すように、実際現地での生徒達の積極的な行動や取り組み状況は、肯首できるものである。また、今回の行事を通しての「成長度」を見てみると、特に「関心・意欲・態度」の項目で本校は 4.72(同、3.73、4.95)と全国平均を大きく上回っている。

次に、訪問地別の「満足度」では、①カレン族の村滞在 5.00(昨年度 5.00)、②チェンマイ・チェンライの NGO 施設訪問 4.80(同 5.00)、③バンコク・カンチャナブリ NGO 施設訪問 4.60(同 4.70)、④レジナカレッジ訪問・ホームステイ 4.70(同 5.00)、⑤在タイ日本大使館・ILO 訪問 4.60(同 5.00)となりいずれも高い数値を示した。特に①はどの年度においても生徒たちの満足度は最も高くなっている。

1 年次より世界のさまざまな問題に目を向け、本校の SG のテーマ「フィールドワークを通じた多民族社会における平和的発展の研究」に沿って、今回のタイ・フィールドワークで生徒各自の研究テーマを設定し、現地で訪問した施設・NGO で積極的にインタビュー調査やアンケート調査を行なった。現地での生徒の熱心に取り組む姿勢は、帰国後も変わることなく、現在生徒たちはその調査結果を基に課題研究論文を作成中である。帰国後さまざまな文献に当たりながら、研究を深め、問題解決の方策を検討していくことが本校のフィールドワークの特徴であるが、現地に足を踏み入れ、実際に自分の目で、耳で得た情景・情報は、安易なネットで得られる情報とは違い、その論を進めていく上でも、しっかりと地に足をつけた形で論文の中で生かされていくであろう。

第2節 高校3年（SGC2期生）異文化研究 II

ロンドン大学研修

- 日時：2018年4月13日（金）～5月25日（金） 全行程43日間
- 場所：英国ロンドン市
- 生徒：スーパーグローバルクラス2期生 高校3年生10名
- 引率：教諭1名(4/13-4/18, 5/20-25), 添乗員1名(4/13-4/18), 現地添乗員1名(月水金の午後)

研修目的	ロンドン大学 SOAS 校への留学により、タイ・フィールドワークの成果を英語論文に仕上げる。そのために下記を目指す。 1) 英語論文の執筆法や学術的な英語表現の習得 2) アジア研究の Lecture や Seminar の受講による広く深い知見の獲得 3) 教授を前にしたプレゼンテーションによる英語での説明能力の向上 また、現地の語学学校への通学やホームステイを通じて下記を目指す。 4) 英語コミュニケーション力の向上 5) 多様な出自を持つ人との関わりによる異文化理解
事前学習	高校二年次のタイ・フィールドワークでの調査にもとづき、2-3 学期の「国際文化」や「英語コミュニケーション」の授業を活用して、研究成果を日本語論文や英文ポスターにまとめた。また、下記の通り事前説明会を実施した。 第1回 ロンドン研修説明会 2017年11月18日（土） 行程確認・留学規則・海外旅行傷害保険に関してなど 第2回 ロンドン研修直前説明会 2018年3月17日（土） しおり配布・現地情報・連絡体制に関してなど
報告事項	以下参照

1. ホームステイ

語学学校 St. Giles International のホームステイコーディネーターによりアレンジされたロンドン市内北部地区に住む現地住民宅でホームステイする。10あるホスト宅は全てロンドン市内を縦断する地下鉄ピカデリーラインの沿線にあり、研修先最寄りの Russel Square 駅までは30分程度。比較的裕福な世帯が住むエリアで、落ち着いて生活できる環境といえる。

生徒一人ひとりに異なるホスト宅が割り当てられるため、英語を使わざるをえない日常生活を送ることができる。夕食は必ずホストと一緒にとるルールになっている。



2. 研修先概要

1) ロンドン大学 SOAS 校 (School of Oriental and African Studies, University of London)

ロンドン大学に所属する地域研究に特化したカレッジ。特にアジア・アフリカ・中近東を研究対象としており、世界有数の規模を誇る研究機関である。100 を超える国や地域からの留学生が通う、非常に国際色豊かな大学。メインキャンパスはロンドン市内中心部のラッセル・スクエア駅を最寄りとしている。ノーベル平和賞を受賞し、ミャンマー民主化運動の指導者であるアウンサンスーチー氏が学んだことでも知られる。



2) St Giles 語学学校 (St. Giles International London Central)

イギリス・アメリカ・カナダに広がる St. Giles グループの語学学校の一つ。英語教師の育成に定評があり、少人数クラス編成による手厚い指導を受けることが出来る。最寄り駅はラッセル・スクエア駅で、SOAS 校までも徒歩数分の距離である。



3. 研修中の1日のスケジュール

◆第1～2週 St Giles 語学学校での語学研修

-9:00	ホームステイ先より地下鉄で登校
9:00-12:50	St. Giles 語学学校での語学研修 50分授業×4コマ
12:50-13:55	昼食 月・水・金曜は St. Giles のカフェテリア利用、火・木曜は自由。
13:55-15:35	St. Giles 語学学校での語学研修 50分授業×2コマ
-18:00	フリータイムの後、地下鉄でホームステイ先へ帰宅。 ホストファミリーと一緒に夕食。夕食後は歓談したり、自室で勉強したり、思い思いに過ごす。

◆第3～6週 ロンドン大学 SOAS 校での研修

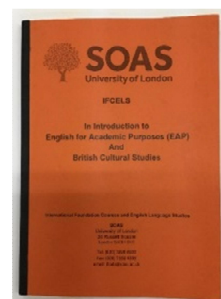
-10:00	ホームステイ先より地下鉄で登校。図書館や教室で予習・調査学習。
10:00-12:00	ロンドン大学 SOAS 校での講義受講・議論・発表 120分授業×1コマ
12:00-13:00	昼食 月・水・金曜は SOAS のカフェテリア利用、火・木曜は自由。
13:00-15:00	ロンドン大学 SOAS 校での講義受講・議論・発表 120分授業×1コマ
15:00-18:00	図書館やフリースペースで調査学習の後、地下鉄でホームステイ先へ帰宅

4. ロンドン大学での授業内容

生徒達は 4/30-5/23 の約 4 週間、13:00～15:00 まで、SG 生だけを対象とした特別プログラムで論文指導や様々な講義を受けた。指導内容は以下の三つに大別される。

1) 学術英語と論文指導

昨年度に引き続き、SOAS の教授 Dr./Ms. Catherine Lewis (EAP Teacher, International Foundation Courses and English Language Studies)が、本校のために作成した専用テキスト「In Introduction to English for Academic Purposes (EAP) And British Cultural Studies」に沿って指導し、そのうえで各自の論文の個別指導を丁寧にしてくださった。お蔭様で、10 名全員が研修最終週までに英語論文を完成させることができた。論文指導の詳細については後述する。



2) 講義とセミナー (Lecture and Seminar)

Lecture は教授陣による講義である。例えば下記のようなテーマの講義が行われる。

- Development • Education • Poverty (Street Children)
- Refugees • Textiles

Development の講義では、開発・発展の定義、測定の方法、経済的な支援のありかた、などについて学ぶ。

Textiles の Lecture では、東南アジアに住む様々な先住民族の織物の模様が表す意味や、作業の男女分業が持つ社会的な意味に関して講義がなされる。Lecture の翌日には Seminar が開かれる。Seminar は講義の振り返りをしながら生徒たちが与えられた論題に関して議論する時間である。Textiles の Seminar では、各グループに織物が渡され、その分析を議論して発表するという実践的かつ効果的なアクティブラーニングであった。また、課外学習として、若者のホームレスを支援している NGO 「Centre Point」への訪問が実現した。



3) ディベートやプレゼンテーション

ディベートの授業は計 2 回行われた。いずれも事前に各種の参考資料が配付されており、一定の知識を前提にディベートに臨むことが求められた。ディベート当日、生徒たちは賛成 4 人、反対 4 人、司会 2 人に分かれて、自分たちだけで全て進行した。初回はディズニーキャラクターから考えるジェンダー論、第 2 回目は死刑制度についてであった。約 1 時間弱にわたり、生徒達は英語で議論を展開した。

プレゼンテーションは、2 名の教授から指導を受け、全員が自分の課題研究について ppt を使って発表した。先生方からはその場で内容・発表両面において良かった点と改善すべき点が指摘された。



生徒アンケート

1. 満足度調査

学校行事評価システム SEAS の結果とそのポイントを以下に示す。

	1	2	3	4	5	今年度	昨年度	全国平均
総合的な満足度								
今回の行事に全体として満足している					10	5.00	4.14	4.28
今回の行事に全体として熱心に取り組んだ					10	5.00	4.36	4.20
この行事に参加したことで学校への愛着を感じるようになった				4	6	4.60	2.79	3.27
この行事にはこの学校ならではの伝統や特色があったと思った			1	3	6	4.50	3.07	3.44
各プログラムの満足度								
SOAS での Lecture, Seminar				1	9	4.90	4.57	
SOAS での論文指導				2	8	4.80	4.00	
NGO 訪問				3	7	4.70	—	
St Giles 語学学校での授業				3	7	4.70	4.14	
ホームステイ				4	6	4.60	4.57	

1) 総合的な満足度

参加生徒全員が 5 段階評価で 5 を選んだ。数値が 3 を超えると満足度領域、4 を超えると高満足度領域とされているなか、突出して良好な結果といえる。

昨年度は学校への帰属意識を問う質問に対する数値が低かったが、今年度は大幅に改善した。本研修は、学校を離れてロンドン大学や語学学校へ通うというプログラムの性質上、学校への愛着を感じさせにくいはずである。しかし、本研修の最大の目的が、SG クラスで二年間にわたって進めてきた課題研究の成果を英語論文にまとめることにあることを、生徒一人ひとりがよく理解して研修に臨んだ結果、良好な数値が出たと考えている。また、本来であれば大学生でないと通えないロンドン大学に通うことができるのは、佼成女子の SG クラスに在籍していたからこそであり、他校では成し得ない独自のプログラムであることを、生徒だけでなく保護者にもご理解頂いた結果であろう。教員もそのことに誇りを持ち、SG クラスのアイデンティティを継承していきたい。

2) 各プログラムに対する満足度

各プログラムの満足度も全て 4 以上の数値が出ており、昨年度と比べても上昇している。その中でも、SOAS での Lecture/Seminar が 4.90 という高数値を出しているのは特筆すべきことであろう。大学教授による全て英語での Lecture/Seminar がこれだけの高評価に至った理由としては下記が挙げられる。

1. 講義のテーマが、生徒たちが実践したタイでのフィールドワークのテーマに関連しているため、自分達が興味を持って調べてきたこととのつながりを感じられたこと。
2. 一方通行の講義ではなく、問いかけ・グループワーク・プレゼンなどを織り交ぜたアクティブラーニング方式だったため、生徒たちが主体的に授業参加できたこと。

3. SOAS の教授陣が海外留学生の扱いに慣れており、平易な英語表現を用いて、分かりやすく強調すべきことを強調して、生徒達の語学力や理解度に合わせた授業を進めてくださったこと。

また、SOAS での論文指導も前年と比べて大幅に満足度が向上した。理由は後述する。

2. 生徒の振り返り

本年度も 6 週間の研修中、毎週末、生徒達に振り返りの報告をさせた。昨年度はメールで提出させたが、今年度は Classi（教育機関用クラウドサービス）のアンケート機能を用い、以下の設問に答える形で記述させた。

ロンドン研修 週報

設問 1 大学や語学学校で今週得られた知的発見を具体的に記しましょう。

設問 2 総合的な所感を記しましょう。

設問 3 次週の目標を具体的に記しましょう。

◆送付のタイミング

週末に記載して送ること。提出期限は英国時間の日曜 22 時。秋田から翌週中に返信します

◆注意事項

- ・全て具体的に記しましょう。ささいなことでも構いません。「特になし」はなし。観察眼と洞察力をフル活用しましょう。
- ・言語化することによって、漠然とした気づきが自分の中で意識化されます。ポジティブな気持ちで書きましょう。

以下、生徒の報告の中から、特徴的なものを列挙する。生徒の成長の軌跡が分かるよう、時系列順に並べてある。

生徒からの報告
第 1-2 週
普段学校で習っているアメリカ英語に近い英語と、本場のイギリス英語での語彙の違いや文法の違いが感じられた。日本で勉強する英語よりも、より自然なネイティブが話す英語に近い英語が学べた。 街や店で肌の違いや服装の違い、言語の違いなどを通してイギリスは多民族国家だということを感じた。イギリスのような多民族国家では、イスラム教の 1 日 4 回の礼拝のスペースの確保などを行っているのかなどを調べたい。
授業内で英単語の意味を英語で答えるというのがスムーズにでき、特設英語でやったスカイプが St.Giles での授業に役立っていると実感しています。また、さまざまな国の人が同じクラスにいて、ちょっとした会話から新しい知識が増えていくので St.Giles での出来事は全てが勉強になります。例えば国によって遺産相続の仕組みが違うことです。国によって違うのは当たり前かもしれませんが、スイスやイタリアは誰が何割貰うなど細かく国で定められていると、私は初めて知りました。
先週と少し被ってしましますが、日本とは違うスタイルの授業を受けて、ディスカッションすることがとても大事なのだと言うことが改めてわかりました。同じ SG クラスの子であっても、英語でディスカッションするだけで 1 回の授業で吸収できたと感じるものが大きく違うと感じました。例えば、英単語や文法の知識です。また最後の方の授業では、同じ性別同士で結婚することにどう思うかというので、ちょっとした話を読んで、問題を解いたり、ブラジル、ドイツ、イタリア、中国など色々な国の人達と意見交換をして、差別的なことについて英語で話したりしました。私はまだ知識が少なく、同じ性別同士で付き合ったり結婚していることには見えても少し抵抗がありました。ところが、イギリスに来て町中を見ると、思った以上に同じ性別同士のカップルを見ました。そして、授業でもクラスの人たちが差別せずしっかりと受け止めているのを見て私もこの人たちのようにこの様な物事でも受け止めて堂々と自分の意見を言える様になりたいと思い勉強になりました。日本ではなかなか出来ない体験をすることが来てよかったです。また、無事に St.giles を終えることができてよかったと思いました。SOAS も頑張れたら頑張ります。
今回は、語学学校での授業の違いを述べていきます。私が語学学校での二週間を通して感じた最大の違いは、授業形式の違いです。まず、授業形式の違いを生徒と先生にそれぞれ着目してみました。セントジャイルズ語学学校では一週間単位でコースが受けれるようになっていて、入学時のクラス分けテストで最大 6 クラスにレベル分けされます。私が

いたのはアドバンスクラスで、生徒は5-6人しかいなく、全体的にも15人を超えることがなく、一クラスの人数は少ないです。また、年齢層も私たちのような高校生から50代までかなり幅広い年齢層となっています。従って、私のいたクラスでは年齢層が高かったので、かなり頻繁にビジネスの話題や政治の話題が出て、先生も柔軟にその話題に関して英語及びイギリスの背景知識の学習を促していました。これは少人数制の最大のメリットだと感じます。生徒も、欧米とアジアでかなり受講姿勢が違うなと感じました。例えばアジア系の方は、私も含め、先生の話をつき聞いてノートを書ききれいにまとめるのは得意ですが、授業中に先生の話や全体の流れを遮るのが苦手で、なかなか積極的に討論に参加できませんでした。それに比べて、欧米の人々は先生と同じ立場で討論したり、発言をしていました。ただ、遅刻や欠席率が高かったり、授業中ずっとスマホでSNSをしていたり、少し自由すぎる場面もたびたびありました。この差がなぜ惹起したのか。わたしは個人的にその国それぞれの教育の重きの置き方の違いだと考えました。アジアでは勉強は良い大学、よいキャリア、よい職に就くためというのが大きな目標であることが受験競争の激しさや、まだ残る学歴社会が示しています。台湾や韓国の学生に聞いても、やはり授業はセントジャイルズに比べるとかなり受動的で、受験競争の壮絶さも聞きました。一方、欧米ではこのようなことはなく、大学受験は形式上のことが多く、高校でしっかり単位を取っていれば、進学先がある程度融通が利くことがフランス、スイス、イタリアなどの学生からうかがえました。この国々は勉強を道具としてはなく、それが目的となる学び方をしていると思います。なぜなら彼らは大学進学、または就職前にギャップイヤーと言って、文字通り一年自分のやりたいことやしておきたいことをする期間をとることがかなり一般的であり、やりたい勉強もしくは仕事を心に決めてから、その勉強を深めることを目標にしています。例えば私が話を聞いたスイスの19歳の生徒は、語学学校にギャップイヤーとして、自然科学を研究することは決まっているけど、大学に行く前に英語を勉強して、社会経験もして、本当に研究員になるのかを決めるために一年来ていました。このように、勉強を道具としてでなく、目的としても視ているから、それだけ自然に積極的に参加できるのだと思います。

次に先生の視点から見ると、すごく上手な教え方をしていると感じました。マニュアル通りではなく、生徒の興味関心に応じてささっとインターネットや新聞を活用して、授業を活発な討論が起きるように色々工夫をしていました。一番驚いたのはいつも突然、じゃあ今まで習ったことなんでもいいから3つ言ってみて？というような質問を頻繁に聞いてくる先生がいたことです。毎回一つの授業で何か得て帰ってほしいという短期間の語学学校の先生だからこそ強く即座のアウトプットを求めているのではないかと感じました。一回一回の授業がとても濃密で、学ぶことが大変多かったです。最初はこの形式になれなくて、頭が真っ白になり答えられないことが一回ありましたが、最後の方はすらすら出てきて、脳の知識の処理の仕方が変わったと感じました。日本はアクティブラーニングを進めていますが、本当のアクティブさは自分でスイッチを変えないと、政府や先生が頑張ってもダメなのかな、と考えたりもしました。

第 3-4 週

木曜日に 2 人の大学教授の方が、“development”をテーマに講義をしてくださいました。このテーマは日本でも特に発展途上国について学んできました。なので、そこまで難しくはないと思っていましたが、この講義を聞いて自分の弱みを知ることができました。具体的に言うと、日本では合宿や国際文化の授業を通してこういったテーマについて詳しい方のお話や、発展途上国の人々の支援している方などにお話を聞いてきました。しかし、講義中に“なぜ先進国と発展途上国のように差が生まれてしまうのか。”“Who is responsible of development?” “このような問題をどう解決すべきか。私たちに何ができるか。”などの質問をされるとなかなか答えが出ませんでした。そこで私は、日本で講義などを通して得た知識を情報としてただ単に頭にインプットしているだけだとわかりました。つまり、私は得た情報を自ら考え深めることをしてこなかったと言うことです。私は、このことに気づくことの遅さと自分への甘さに対して恥ずかしくとても反省しました。大学に進学し、大学での講義は自分で考え、自分で解決して、自分自身を成長させなければならないと思います。この講義では、“development”に関することだけではなく自分自身の根本的な弱みを見つけることができたと思います。

今回の講義を通して、経済についてもっと学びたいと思いました。世界には本当に沢山の NGO がありますが、人々を救うためにはお金が必要です。講義では、そんな時 NGO は World Bank などの国際機関との関わりが重要であると学びました。またそのような機関もアメリカやドイツなどからお金を得ており、このようなテーマを学ぶには経済の仕組みや流れを知ることがとても重要であると感じました。木曜日の講義を通して、さまざまな面からの知的発見ができました。

今週は本格的に自分達の論文について取り組む時間が増えてきました。普通に使っていた英語も論文を書くときには使えない言葉があることも知りました。(Nowadays→currently, more and more→an increasing number of, get→obtain, buy, などなど)とても大切なことだと思うので気を付けたいと思いました。また、改めて自分の論文を読み見返していると、やっぱりここの仮説は根拠が薄いから消そうかなとか、ここの結果は間違っていたかなとか、より試行錯誤させられ、英語でもどんどん書いていかなきゃいけないのでとても多忙な1週間だった気がします。宿題一つ一つの量が多く、来週もより忙しくなりそうなので頑張りたいと思います。

第 5-6 週

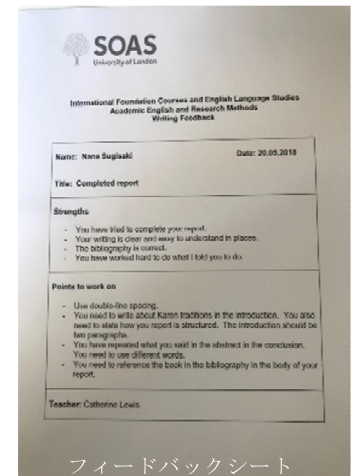
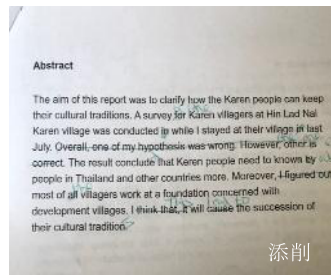
最終週では GM food についてのディベートを行い、相手の意見を理解しそれについての反論を述べる難しさを痛感しました。事前準備では各自で記事を読み、環境や発展、生産者と消費者など分野ごとに分けて意見をグループ内でまとめていきました。分野ごとにまとめると、必要な情報と不必要な情報の整理が比較的簡単にでき、自分の意見もまとめやすくなるとわかりました。これはディベートの事前準備での発見です。準備を終え、本番では予定どおり意見を簡潔に述べられましたが、自分への課題が多く残りました。ディズニーのディベートとは違い、よりアカデミックな内容であったため、反論するのがとても難しいと感じました。例えば、私たち側が安全面について意見を述べた後、相手側から実験で実際の遺伝子組み換えをしたトウモロコシを食べたネズミの体系が変異してしまった例をあげられ、さらに新しい反論をすることが出来ませんでした。今回のディベートを通して、事前に反対側に意見に関する記事もよく読んでどんな反論をされるか予測することがとても重要だと思いました。この GM food についてのディベートでは私たちの賛成側が負ける結果となってしまいました。正直全く納得がいきませんが、あのトウモロコシの例が反対側が勝利した強い要因の一つだと思いました。ディベートで反論を述べる際は、チェアパーソンのように自分自身も頭の中で、意見を整理することがとても重要だと思いました。反論を上達させるには脳内での要約が必要だと発見することができました。
開発学の講義では、公式に出ている統計や声明の信憑性は定かではなかったり、それぞれの発展の定義の正と負の側面が見れて、新しい視点が広がりました。一つのテーマに沿って深めに講義をすることで、学問と学問のリンクも見えてきて、学問上ではそれぞれカテゴライズされているけど、実社会のさまざまな問題では、それぞれの分野ごとで見ても解決はできないんだなと感じました。例えば、HIV の撲滅だけの支援をしていたら、16歳のアフリカの少女が HIV で完治したのに、医療センターの6KM の往復路と貧困による飢餓でこの世を去ったという学術記事を読んで、こんな矛盾することってあっていいのかと深く考えさせられる事実を見つめさせられました。 暗記と情報のインプットもちろん大事だと思いますが、その先に中身のある考察ができるかどうか、根拠のある批判的思考ができるか、というのにも身に着けていけないなと感じました。教授たちのようなクリティカルシンキングができるようになるためには豊富な背景知識が必要なので、暗記、インプットとアウトプットは切っても切れない関係だなと思い、受験のこの一年、ロンドンで学んだこと、学問に対する姿勢を忘れず頑張って合格を勝ち取りたいです。
ホームステイを通して、SOAS の図書館での読書や講義を通して、英語は単なる「道具」ではないと強く感じました。英語を習得することは、単に交流できる人数が増えるだけではなく、そのインターネットだったら最も膨大な資料、図書であった先人らの英知、英語を母語話者とする人々の文化やモノの見方などのアクセスを得れるのだなと体感しました。そのために、英語をもっと上達させたいなと思いました。また、研修を通して、自分の英語もまだまだだなと感じたので、本当に通用する英語力を身に付けていくという課題を発見しました。
今回、私たちは英語論文を完成させるという目的でロンドン研修を行いました。しかし、私は論文作成だけでなく多くのことをこの研修を通して学ぶことができました。なので、私が人にこの研修の良さや価値を伝えるなら、自分がどのような面でどのような学びを得たのかを具体的に伝えたいです。実際、私たちのロンドン研修はどのようなものなのか知らない人は沢山います。また、私たちがどれほど大きな学びを得たのかも知らない人は本当にたくさん存在すると思います。そういった人たちに、私たちが何を学び、どう成長することが出来たのかを思いのままに話すことで、相手自身も沢山の情報を得て影響されると思います。私は、今まで行って来た研修は私たち SG の生徒が学ぶためだけではなく、その学びを伝え他の人も学び関心を持ってもらうことも目的の一つだと思っています。また、どれほどこの研修が価値のあるものなのかを知らない人たちに伝えるには、なぜ私たちが相手に経験したことを伝えたいのかをしっかりと説明することも大事だと思います。

成果

1. 論文指導の大幅な改良

昨年度に比べて、今年度は論文指導が大幅に改良された。昨年度、生徒達は事前に英語論文を書いてから渡英し、St. Giles 語学学校と SOAS で添削して頂いた。しかし、今年度は、事前に英語論文を作成せず、SOAS で一からご指導頂く形とした。これは昨年、国内での英語論文指導・St. Giles・SOAS の三者の指導内容に齟齬が生じたため、SOAS 流の方法論で全て書かせることが得策と判断したことによる。その点を研修開始期にキャサリン先生に再確認したうえで、一から論文指導をして頂くよう要請した。

キャサリン先生は、学術英語の基礎や、SOAS 流の論文構成を自作テキストに沿って指導したうえで、各生徒の論文を丁寧に個別指導して下さった。論文の個別面談指導を2回、フィードバックは論文2回とプレゼン1回の計3回もやって下さった。論文自体を添削するだけでなく、Strength と Points to work on を列挙したフィードバックシートを一人ずつ作成して下さい。これにより、生徒達は論文をさらに良くしていく動機を高めることができた。こうした丁寧な指導を大学教授から直接受けられることは、本研修の最も大きな価値である。次年度以降も踏襲していきたい。



2. 研修時間割の最適化

今年度、研修の時間割を大幅に組み替えたことが功を奏した。昨年度は、6週間の留学期間中、生徒達は平日の9-13時に語学学校へ通い、15-17時にSOASへ通う時間割であった。朝から語学学校でAll Englishのアクティブな授業を4コマ受けることによって相当な疲労感を覚え、研修のメインであるSOASでの活動に影響が出た生徒もいた。そこで、SOAS教授陣からの助言も踏まえ、今年度は前半2週間をSt Giles、後半4週間をSOASというふうに、期間を分けて臨むこととした。この変更がはたしてうまく機能するか心配したが、結論から言えば大いに良かったといえる。キャサリン先生が前年よりも個別指導を手厚くやって下さったおかげもあり、生徒たちにとって、「SOASで英語論文を書く」という目的が、明確に実践できるプログラムになった。授業内での生徒達の反応も、昨年と比べて積極的であり、主体的に学ぶ意欲が学習行動に表れていた。

3. SGクラスの教育カリキュラムの成熟

本校のSGクラスは、高1・2の英語や国際文化の授業で、様々なアクティブラーニング型授業を展開している。英語4技能のトレーニングや探究学習によって培われた主体性が、ロンドン研修中の学びで大いに発揮された。ペアワークやグループワーク、プレゼンテーションなど、議論して発表するというスタイルは生徒達にとって馴染みのある学びの型である。語学学校やロンドン大学でのアクティブラーニング型授業に戸惑うことなく素早く順応できたのは、高校での教育成果の現れといえる。

学術面においても学びの成果が現れている。開発学や経済学など、高校生にとって高度な内容を含む講義に対して強い知的関心を持って臨むことができたのは、課題研究や講演授業などで、教科の枠を超えて国内外の課題について学びを進めてきた成果と言える。また、研修後の6月から11月にかけて展開された高大連携授業では、ロンドン大学での学びの経験が、大学教授の出張授業における積極的な学びの姿勢につながった。

このように、ロンドン大学研修は、単発の短期留学プログラムではなく、高校3年間の学びの流れの中にある研修として機能するようになった。これは、初めからうまくいったことではなく、昨年度SGクラス第1期生の研修で様々な課題を見出すことができ、それを改善したことにより成し遂げられたものである。

第2章 特進留学コース

第1節 高校1年（KGGS15期生）

1. 出発前までの英語力の変化（TOEFL Junior・英検結果）

① TOEFL Junior

留学後 TOFEL iBT に移行してゆくため、これまでは TOEIC を受験させていたが、留学前の英語力をはかるため 10 期生（平成 25 年度）より TOEFL Junior を導入した。15 期生のスコアの平均点は 695 点である。

表 1 685 点以上の生徒数

	2018 年度		2017 年度		2016 年度		2015 年度	
	7 月	1 月	7 月	12 月	7 月	12 月	7 月	12 月
	15 期生	15 期生	14 期生	14 期生	13 期生	13 期生	12 期生	12 期生
受験者数	28 名	27 名	31 名	31 名	26 名	26 名	18 名	15 名
850～	0	0	0	0	1	1	0	0
800～	0	1	2	4	0	1	0	2
750～	4	4	5	3	1	1	2	2
700～	4	11	7	7	4	8	4	6
685～	4	2	3	2	4	4	2	4
計	12	18	17	16	10	15	8	14

表 2 685 点以上生徒割合

	2018 年度		2017 年度		2016 年度		2015 年度	
	7 月	1 月	7 月	12 月	7 月	12 月	7 月	12 月
	15 期生	15 期生	14 期生	14 期生	13 期生	13 期生	12 期生	12 期生
受験者数	28 名	27 名	31 名	31 名	26 名	26 名	18 名	15 名
850～	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	3.8%	3.8%	0%	0%
800～	0.0%	3.7%	6.5%	12.9%	0%	0%	0%	13.3%
750～	14.3%	14.8%	16.1%	9.7%	3.8%	3.8%	11.1%	13.3%
700～	14.3%	40.7%	22.6%	22.6%	15.4%	15.4%	22.2%	40.0%
685～	14.3%	7.4%	9.7%	6.5%	15.4%	15.4%	11.1%	26.7%
700 以上	28.6%	59.2%	45.2%	45.2%	23.0%	23.0%	36.8%	57.9%
685 以上	42.9%	66.6%	54.8%	51.6%	38.4%	38.4%	47.7%	78.9%

② 出発前の英検結果

9 期生以降、約 35% の生徒が英検 2 級以上に合格し、ニュージーランドへ 1 年間留学している。15 期生は 5 割の生徒が英検 2 級以上に合格している。また、準 2 級を未取得のまま留学する生徒は非常に少数である。

表 1 出発前の英検合格者数

	15 期生	14 期生	13 期生	12 期生	11 期生	10 期生	9 期生
受験者	28 名	32 名	26 名	19 名	40 名	46 名	29 名
1 級	0	0	0	1	0	0	0
準 1 級	0	1	1	0	0	0	0
2 級	14	14	9	7	14	19	10
準 2 級	12	14	15	11	25	22	18
3 級	2	3	1	0	1	5	1

表 2 出発前の英検合格者割合

	15 期生	14 期生	13 期生	12 期生	11 期生	10 期生	9 期生
受験者	28 名	32 名	26 名	19 名	40 名	46 名	29 名
1	0.0%	0.0%	0.0%	5.5%	0.0%	0.0%	0.0%
準 1	0.0%	3.1%	3.8%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
2	50.0%	43.8%	34.6%	36.8%	35.0%	41.3%	34.5%
準 2	42.9%	43.8%	57.7%	57.9%	62.5%	47.8%	62.1%
3	7.1%	9.4%	3.8%	0.0%	2.5%	10.9%	3.4%

2. 事前学習（事前合宿など）

本校の「特進留学コース」のニュージーランド留学は今年度で 16 年目を迎えたグローバル人材育成のコースである。その目標は「英語力の向上」「異文化理解」「自立心の養成」である。クラス全員が 1 年間の留学という同じ目標を持って団結力を高めることにより、実用的かつ質の高い英語力を醸成することが可能となる。また、日本を相対的に捉えることのできる広い視野を身につけることができる。

本校では「自立心の養成」を目的とした留学事前合宿を年 3 回実施している。クラスの団結力を高め、留学の心構えを養うことを目的としている。

① 第 1 回事前合宿 平成 30 年 7 月 25 日（水）～27 日（金）

場所：本校

目的：・留学に向けての決意を固め、今後の学習意欲を高める。

- ・留学に適した自立した生活態度を身につける。
- ・留学での困難を乗り越えるための団結力を高める。
- ・第 2 回英検で準 2 級全員取得、2 級を超える上位級に 1 人でも多くの生徒が合格するための英語力を養う。

内容：TOEFL Junior 受験、英語グループワーク・発表、卒業生の話、留学規則、調理実習、文化祭準備、SGE など

② 第 2 回事前合宿 平成 30 年 8 月 27 日（月）～ 29 日（水）

場所：立正佼成会 青梅錬成道場

目的：・留学に向けての決意を固め、今後の学習意欲を高める。

- ・留学に適した自立した生活態度を身につける。
- ・留学での困難を乗り越えるためのクラスの団結力を高める。
- ・第 2 回英検に全員が上位級取得を目指した学習に取り組む。

内容：英検模試、英語アクティビティ（浴衣着付け）、留学ケーススタディ、卒業生の話、文化祭準備、SGE など

③ 第3回事前合宿 平成30年12月18日（月）～20日（水）

場所：立正佼成会 横浜普門館

- 目的：・留学での困難を乗り越えるための団結力を高める。
・留学に向けての決意を相互に確認し、留学意欲を高める。
・留学に適した自立した生活態度を身につける。

内容：NZ チーフアドバイザー講話・面談、校長講話、英語スピーチ練習・アクティビティ、留学ケーススタディ、留学コース生徒（13期生・14期生）の話、SGE など

3. 日本文化論

本校の留学コースでは、留学前の高校1年次に「日本文化論」という学校設定科目の授業を履修する。この授業では、日本の文化について学ぶと共に、新たに得られた知見を援用して、どのように他者に伝えていくかという技術を学ばせている。

出発までの第1学期・第2学期（4月～12月）の間、「日本の歴史と宗教の関係を知り、海外の宗教と比較しながら、なぜ日本人は「無宗教」と答える人が多いのかについて考えることを目的とした。さらに、「現代日本人の宗教観を、どのように海外の人に説明できるか」という問題について考察した。

教材は『課題研究メソッド』（啓林館）を使用した。課題研究の方法を学ぶことができ、留学中のフィールドワークの手法を知る意味でも活用できるものである。

評価については、定期試験を実施せず、以下の項目を総合評価し、各学期10段階で算出した。

- ① 思考・判断・表現（調べ学習・発表） …40%
- ② 資料活用の技能（課題研究等のまとめ方・内容） …40%
- ③ 関心・意欲・態度（授業・発表態度、課題等の提出状況） …20%

また、フィールドワークのインタビュー調査の手法を学ぶため、冬期休業中に「家族・親族のライフヒストリー」のインタビューを課した。その調査内容をまとめ、出発前の特別編成授業時に各自プレゼンテーションを行った。

第2節 高校2年（KGGS14期生）

1. シドニー大学研修

(1) 研修の目的

- ・ 留学生活最後の英語力のブラッシュアップをする。
- ・ SGH テーマ研究内容を発表し、帰国報告会の準備をする。
- ・ 多民族社会であるオーストラリアの異文化について学ぶ。

(2) 研修の概要

- ・ 事前オリエンテーション 平成30年11月17日（土）～11月18日（日）
※ シドニー市内ホテル宿泊 Aspire Hotel Sydney
- ・ シドニー大学研修
第1週目 平成30年11月19日（月）～11月23日（金）
第2週目 平成30年11月26日（月）～11月30日（金）
※ 各自シドニーのホスト先にホームステイ

(3) 研修の内容

< 午前の講義：IELTS 対策（4技能） >

シドニー大学附属の語学学校教師による講義を受講。IELTS の教材を用いて実際の問題形式に則して演習、解説を受けた。2週間を通して Reading, Writing, Listening, Speaking の4技能を効果的に伸ばすための学習に取り組むことができた。生徒たちはニュージーランドで学習していた内容よりもさらにアカデミックな内容の問題に取り組んだ。授業内では活発に質問をしていた。

< 午後の講義：SGH テーマ研究に則した内容の講義など >

午前とは異なる大学講師による講義や大学学生ボランティアによる活動が行われた。また SGH テーマ研究に基づくプレゼンテーションを32名全員の生徒たちが行った。大学での講義や発表の経験は大きな刺激となっていた。

1) 講演会

研修期間中に2回の講演会が実施された。1回目はオーストラリアのNGO団体である Fred Hollows Foundation の方の講演が行われた。この団体は、眼科医の Fred Hollows 氏が設立したもので、途上国に安い眼科医療を提供することに尽力し続けている。これまでの活動に関する紹介があった。2回目は世界最大のNGO団体とも言われる Amnesty international の方の講演が行われた。日本でも活動している国際人権団体だが、特にオーストラリアの事務所で取り組んでいる先住民族アボリジニの人権問題や、海外で人権侵害に遭った人たちをどのように救ってきたかが語られた。



2) Lecture for Presentation

ニュージーランド留学中に一人ひとりがフィールドワークを実施した。講義プレゼンテーションを行うにあたり効果的なポイントや注意点の指導があった。25名のプレゼンテーション実施後は、各自にフィードバックが行われた。

《シドニー大学研修の成果と課題》

シドニー大学とは平成 27 年度に業務提携を行い今回 4 回目の研修実施となった。生徒たちは、ニュージーランドにおける 10 カ月間の留学で得た自立心と英語力、異文化を理解し受容する力を基に、大学でのプログラムを心から楽しんでいた。

IELTS 対策の講義内容は、高い難易度に苦戦する生徒もいたようだが、フレンドリーな先生方の丁寧な指導の下、生徒たちもよく理解できたようである。また、午後の講義、活動では、本校 SGH 研究テーマである「多民族社会における平和的発展」について考察する上で、有意義なプログラムが実施できた。成果の一つである英語力については、事項の「帰国後の英語力の変化」で検証したい。

課題点としては、前年度に引き続き、シドニー大学担当者との事前連絡が困難を極めたことが挙げられる。昨年の反省を生かし、日本サイドから数ヶ月前に連絡を入れたつもりであったが、プログラムの詳細が決まったのは直前であった。このため、よいコミュニケーションがとれていればもっと充実したものにできたのでは、とやや後悔の残るプログラムになってしまった。8 月頃に現地サイドの責任者が突然退職してしまい、次の責任者にほとんど引継ぎがなされなかったことも原因の一つとして挙げられる。

2. 帰国後の英語力の変化

KGGS14 期生の生徒たちが、ニュージーランドおよびシドニーにおける留学、研修で得られた英語力については、外部英語力判定テストを用いて検証する。

(1) 実用英語技能検定（実施団体：日本英語検定協会）

実施回：高校 1 年次（留学前）2017 年度 第 1 回、第 2 回

高校 2 年次（帰国後）2018 年度 第 3 回※

※発表が間に合わないため 1 次試験合格者の人数を記載

留学前英語力（2017 第2回）

	14 期生		13 期生		12 期生		11 期生		10 期生		9 期生	
生徒数	32名		26名		19名		40名		46名		29名	
1	0	0.0%	0	0.0%	1	5.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
準 1	1	3.1%	1	3.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
2	14	43.8%	9	34.6%	7	36.8%	14	35.0%	19	41.3%	10	34.5%
準 2	14	43.8%	15	57.7%	11	57.9%	25	62.5%	22	47.8%	18	62.1%
3	3	9.4%	1	3.8%	0	0.0%	1	2.5%	5	10.9%	1	3.4%

留学後英語力（2018 第3回）※14 期生のみ 1 次試験合格者の人数を記載

	14 期生		13 期生		12 期生		11 期生		10 期生		9 期生	
生徒数	32名		26名		19名		40名		46名		29名	
1	0	0.0%	0	0.0%	1	5.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
準 1	7	21.9%	5	19.2%	3	15.8%	5	12.5%	5	10.9%	3	10.3%
2	23	71.9%	16	61.5%	14	73.7%	30	75.0%	33	71.7%	23	79.3%
2 級以上	30	93.8%	21	80.8%	18	94.7%	35	87.5%	38	82.6%	26	89.7%

留学前（2017 第2回）と留学後（2018 第3回）の合格級を比較した際に、準1級（CEFR B2 レベル）の合格者が 3.1%から 21.9%、2 級（CEFR B1 レベル）以上の合格者（延べ数）では 46.9%から 93.8%へと顕著な上昇が見られている。留学生活においては、現地の英語の課題に取り組むとともに、文法力や難解な語彙力を育むために日本からの課題にも取り組ませている。また、SGH フィールドワークを実施する際に、アンケート調査やインタビュー調査を行った生徒も多く、こういった一連の活動の中で 4 技能型の英語能力が身についたのだと考えられる。

(2) TOEFL Junior

（テスト作成：ETS、日本事務局：Global Communication & Testing Co）

実施回：高校 1 年（留学前）2017 年 12 月

高校 2 年次（留学中）2018 年 7 月（NZ ロトルア合宿にて）

留学前（2017 12 月）

	14 期生	13 期生	12 期生	11 期生	10 期生
受験数	31	26	15	39	45
850-	0.0%	3.8%	0.0%	0.0%	0.0%
800-	12.9%	3.8%	13.3%	2.6%	6.7%
750-	9.7%	3.8%	13.3%	15.4%	17.8%
700-	22.6%	30.8%	40.0%	15.4%	22.2%
685-	6.5%	15.4%	26.7%	12.8%	8.9%

留学中（2018 7 月）

	14 期生	13 期生	12 期生	11 期生	10 期生
受験数	32	24	19	40	46
850-	6.3%	0.0%	10.5%	2.5%	2.2%
800-	21.9%	29.2%	15.8%	20.0%	17.4%
750-	21.9%	33.3%	42.1%	30.0%	41.3%
700-	37.5%	29.2%	26.3%	25.0%	13.0%
685-	3.1%	4.2%	5.3%	17.5%	4.3%

留学前と留学中の英語力を比較するため、TOEFL Junior を実施した。留学前の結果と比べると、明らかに英語力の上昇を見てとることができる。700 点以上の人数は留学前の約 45%から約 90%へと飛躍的に向上していることが客観的にも明らかである。

3. 帰国報告会の実施

(1) 目的

- ・一年間の留学を通して得た経験を発表し、成長した姿を見てもらう。
- ・SGH の研究テーマ「フィールドワークを通じた多民族社会における平和的発展の研究」に則した研究成果の発表を行う。

(2) 日時・場所

平成 30 年 12 月 15 日（土）13：30～15：00 本校講堂

(3) 次第

学校長挨拶

第 1 部 SGH テーマの研究成果発表

第 2 部 各学校によるプレゼンテーション

講評 青山学院大学 地球社会共生学部長 平澤 典男先生

(4) 内容

当日は 14 期生の保護者の他、翌年の留学を控えた 15 期生生徒及び保護者をはじめ本校特進留学コースへの入学を希望している多くの方々が来校され、熱心に生徒たちのプレゼンテーションに耳を傾けていた。生徒たちは、1 年間留学で得た多くの経験から学んだことをすべて英語で発表した。その姿は、1 年間留学を成し遂げた自信と今後の希望に満ち溢れたものであった。

第 1 部での研究成果発表では、3 名の生徒が代表して発表した。

第 2 部では、各現地校パートナーと共に、与えられたテーマに沿ってニュージーランドの学校生活や教育内容等を、パワーポイントを使用して発表を行った。

4. SGH テーマ研究の成果と課題

今年度の高校 2 年生は、留学前の高校 1 年次に初めて授業内で課題研究の準備学習を行った。その際は、自分の関心のあるテーマを自由に選び、グループを組んでポスター発表をさせるという簡易なものであったが、留学中の研究を進めるに当たって、一度テーマ設定から発表までの流れを経験したことが

あるというのは効果的であった。また、gmail や google document を利用した即時性の高い指導も行うことができたため、例年よりも深い研究ができた生徒も現れた。

ただし、32 名という人数を少ない教員で指導していくこと、また、国を挟んでの指導にはやはり困難が多かった。今後この研究活動を進めていくにあたり、指導教員の人数確保、また、生徒が選択したテーマに習熟した教員に生徒を振り分けて指導する体制の構築等が必要になると考えられる。

最後に第 1 部の生徒たちが発表内容をエッセイにまとめたものの一部を資料として付す。

【資料 SGH テーマの研究発表】

100% Renewable energy

Shortly after I arrived in New Zealand, I learned about/ Jacinda Ardern, the new female prime minister of New Zealand. She's only 38! I was surprised that such a young mother could run a country! I was drawn into her innovative new policy of "achieving 100% renewable energy by 2035". I decided that this is what I'd like to pursue for my fieldwork.

Renewable energy is defined as "energy collected from renewable resources." It means to use "clean and green" energy generated from sunlight, wind power and hydraulic power. Please look at this pie chart. Currently, 80% of New Zealand's energy consumption is supplied by the renewable energy, which makes New Zealand the top runner of environmentally advanced nations. On the other hand, according to the METI Agency for Natural Resources and Energy, only 12% of Japan's energy consumption is supplied by renewable energy. In addition, according to the METI report, the self-sufficiency rate of energy in Japan is only 8%. This means that Japanese people rely on imported energy for most of their energy consumption - only a small portion of energy is produced domestically.

I was disappointed to learn how Japan is so behind in terms of renewable energy and environmental conservation. Then I wanted to know the reasons behind the difference between these two countries. Is it because of the leadership of the nation? Is it due to the mentality of the people? Or the differences in lifestyles? My hypothesis was that it could be related to the differences in awareness of the people. After I went to New Zealand, I noticed how people are aware of the importance of environmental conservation. So, I thought of conducting an awareness survey to find the differences between high school students in NZ and Japan.

Moving on before I carried out my survey, I did some preparations. I kept a record of how I use electricity each day. As expected, I use electricity the most for my cellphone. My survey targets are high school students, so I assumed that their use of electricity must be similar. I also read the RENEWABLES 2018 GLOBAL STATUS REPORT to find what may be the possible reasons for supporting or rejecting renewable energy. From my research, I found that the merits of using renewable energy were mainly related to discharge of carbon dioxide, depletion of resources, and reducing harm to animals and nature. On the other hand, the demerits of renewable energy were related to high costs, unsteady supply and difficulty to build new plants to generate more renewable energy. Based on these preparations, I created a survey including six questions and asked 100 students in New Zealand and 60 students in Japan to respond to my survey via g-mail.

Q1: Do you support the idea of using 100% of renewable energy in the future?

An overwhelming 96% of students in NZ answered ‘yes’ while 75% of Japanese students said they would support the idea.

Q2: Please specify the reason for yes

60% of both New Zealanders and Japanese students responded that they support the idea because they can reduce the emission of carbon dioxide.

Q3: Please specify the reason for no

Among those who said ‘no’ to supporting renewable energy, 33% of New Zealanders and 60% of Japanese students said it is impossible to have a steady supply of renewable energy. In addition, the other 33% of New Zealanders answered they would not support it because it is not feasible to develop new hydraulic power plants.

Q4: Where do you use electricity the most?

For this question, the choices of answers were: cell phone, laptop, room lighting at home, hair dryer, heater and air conditioner. The top two choices of New Zealanders were room lighting at home and laptops. Japanese students’ overwhelming choice was their cell phone!

Q5: If you have to save electricity to achieve the goal of using 100% of renewable energy, are you willing to limit the use of the item that you chose?

74% of New Zealanders answered ‘yes’ while 53% of Japanese students said they would limit the use of it. When I asked, “supposing that the New Zealand (or Japanese) government passed a new law to ban the use of cell phones on Sundays. Could you live with it?” Both New Zealanders and Japanese students’ support rate of renewable energy decrease when they were told to save electricity. This seems to be the common point between New Zealanders and Japanese students. 22% of students changed their minds about supporting renewable energy when they learned that it involves sacrifice.

Q6: Finally, if you have any thoughts, ideas or opinions, please specify

For the open-ended question, a few New Zealanders suggested building giant solar panels that would feed into the households so that they can store solar energy to prepare for the shortage and supply of renewable energy. On the other hand, most Japanese students wrote that the government should make a national policy of saving electricity. For example, turning off lights after 12 am or setting air conditioners at a certain temperature.

There are three things that I found from my survey. First, both New Zealander and Japanese are supportive of using 100% renewable energy. Second, the number of people who support the idea decreases when they face inconvenience. Third, the inconvenience we face is related to an unsteady supply of energy due to weather. When we face inconvenience, we tend to prioritize our own selfish needs rather than making sacrifice for the greater good.

In conclusion, since it is impossible for humans to control the weather, one way to solve the unsteady supply of renewable energy is to store energy and use energy wisely. Just as we save money for the future. While I understand that solving this problem is not easy as it seems, especially for an industrialized country like Japan. We need to be more creative, cooperative and compassionate to solve both the issues in front of us. As Jacinda Ardern once said, “if you push ahead and hold a bit of self-belief in your ability to do a job” it may one day be possible to realize 100% renewable energy. Thank you.

Mihai Andrei. "New Zealand's prime minister wants to go fully renewable by 2035." ZME SCIENCE. 9 Sep. 2017. Accessed <https://www.zmescience.com/ecology/climate/new-zealand-renewable-energy-09112017/>
http://www.enecho.meti.go.jp/category/saving_and_new/saiene/renewable/family/index.html
<https://www.eeca.govt.nz/energy-use-in-new-zealand/renewable-energy-resources/>
http://www.ren21.net/wp-content/uploads/2018/06/17-8652_GSR2018_FullReport_web_-1.pdf
<http://www.recod.jp/epress/recycle-merit-issue/>
<https://nzlife.net/archives/14772>

Gender Equality in Education in New Zealand

The theme of my fieldwork study was gender equality. Do you know where the first country in the world to give women the right to vote was? Actually, it was New Zealand. 125 years has passed since women were given this right. Now, we all know the face of Kate Sheppard from New Zealand's ten dollar note, but she was one of the leading figures of the women's voting rights movement.

According to the "World Economic Forum", the Gender Gap Index had New Zealand in 9th place in 2017. On the other hand, Japan was in 114th place. By the way, the "Gender Gap Index" is comprehensively evaluated based on economic power, education, political power, and health. What's more, Jacinda Ardern who became the New Zealand's Prime Minister in October 2017 is the first woman to take maternity leave during her term in office in the world.

In New Zealand, females get involved in politics pro-actively, compared with females in Japan, where only 10.1% of politicians are women. In addition, New Zealand introduced a new law regarding equal pay in September this year. Knowing these differences, I wanted to know what kind of thinking, or cultural background leads to them, and at the same time, I wanted to find some solutions to help create a society in which both males and females can shine.

My three research questions were what do New Zealand students think about the topic of gender inequality? (Are they open to discussing the topic?). Do New Zealand and Japanese females feel gender inequality in their daily lives and at school? And do females feel disadvantaged when they try to get further education, get a job, or get promoted at work in these countries?

I surveyed 31 New Zealand and 57 Japanese females including adults and students using a paper questionnaire. The age range was from 15 to 70.

First I asked, "Do you feel there is gender inequality in your daily life, or school life?"

I found the majority of adults feel there is gender inequality in their daily life, even though most students answered there's not in Japan. Surprisingly, I got a similar result in New Zealand as well. However, when I focused on the main reasons, I could see some differences. As you can see, 73% of Japanese females answered that they feel inequality regarding the responsibilities of childcare and housework. On the other hand, looking at New Zealand females, we can see a large majority of them

mentioned leadership roles and opportunities for work.

What's more, I asked girls in New Zealand if they feel uncomfortable talking about gender issues. I found most of them are open to talking about such issue like the wage gap, and inequality in education. These answers show students are open to discussing gender discrimination, but they may not always recognize it.

Second was, "Do you think females face disadvantages when they try to get further education, get a job, or are promoted at work in your country?" In Japan, as you can see, most of them feel disadvantaged. Now, looking the New Zealand's results specifically, both had a higher percentage of 'Yes' in order of; promotion at work, getting a job, and taking further education. In addition, I found adult females are more likely to feel that they are facing disadvantages than students in any of these three fields.

In conclusion, females still feel that they are facing disadvantages due to their gender in both New Zealand and Japan, and adults feel such discrimination more than students in both countries. However, as I expected, the number of people who feel they have experience gender discrimination was about 10 % less in New Zealand than in Japan and the main reasons were different. On the other hand, in contrast to my original hypothesis, I found that females are still feeling disadvantages even though New Zealand is progressing well towards becoming a gender-equal society according to the world economic forum. It was an unexpected result. This suggests that while the government policies should encourage equality in society, this is not always happening in reality.

What can we do to deal with this issue in our daily lives? Actually, the answer is simple. For example, we can start from just the simple things such as sharing the housework, making respectful relationships with each other, and creating equal opportunities at work and education. Through this fieldwork, I realized some differences between Japan and New Zealand.

This time, I mainly gathered women's opinions and feelings, so next time, if I have an opportunity, I'd like to focus on the relationship between males' attitudes or government policies related to gender equality.

Bibliography

(一財)自治体国際化協会シドニー事務所「ニュージーランドにおける女性の社会参画」『CLAIR REPORT No.410』(2015年3月) <http://www.clair.or.jp/j/forum/pub/docs/410.pdf>

World economic Forum 2017

http://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2017.pdf

<https://www.globalnote.jp/post-3877.html>

UN Women

<https://iwhc.org/2018/02/un-women-report-gender-equality-troubling-reality/>

UN Women

https://www.un.org/sustainabledevelopment/wp-content/uploads/2016/08/5_Why-it-Matters_GenderEquality_2p.pdf

第3章 日本スリランカ青少年交流

1. 平成30年度 日本スリランカ青少年交流 報告

- 日時：平成30年8月23日（木）～8月30日（木）
- 場所：スリランカ民主社会主義共和国
- 生徒（人数）：16名（高校1年生）
- 引率教員：酒井教雄（学校法人佼成学園顧問）・浦田さゆり（生徒指導部長）・三浦利紗（教諭）
- 事前事後学習指導：片桐正雄（教諭）
- 同行協力者：立正佼成会スリランカ教会 山本佳代子（教会長夫人）
通訳 Hasanthi Praharsha（スリランカ人日本語教師）

研修目的：	日本とスリランカの青少年が交流する事で国際理解を深めることを目的とする。 異なる民族、文化、宗教の青少年が参加することで、豊かな異文化理解の場にする ことができ、合わせて世界遺産の宝庫と言われるスリランカの歴史と文化を学ぶ。
-------	--

事前説明会：	6月2日（土）第1回参加者対象説明会（14：00～15：10） プログラム日程表・誓約書・承諾書・事前研修予定・海外旅行保険について・ 渡航伺い書・健康状況調査書・医療同意書・ホームステイ申込書・旅券申請とパ スポート提出用紙・『スリランカ徹底ガイド』・スリランカマップ 7月21日（土）第2回参加者対象説明会（9：00～10：00） 旅行のしおり・保護者留守宅案内 8月21日（金）参加者対象直前説明会（9：00～10：00） 海外旅行保険証・ネームタグステッカー・ネームタグステッカー・ 日本税関申告書・現地離発着時のお知らせ・乙女祭展示に向けて・研究計画書・ホ ストファミリー情報・ホームステイリスト（部屋割り）
--------	--

事前学習：	7月12日（木）ホームステイ英語講座Ⅰ：本校ネイティブ教員 7月20日（金）ホームステイ英語講座Ⅱ：本校ネイティブ教員 7月21日（土）①昨年度参加者体験談：高校3年生（2名） ②SGHテーマに基づくスリランカ課題研究及び調べ学習 ガイドダンス 7月23日（月）①ホームステイ心得・マナー ②Peace Note 作成（日本文化や家族紹介） ③歌練習 7月24日（火）講演Ⅰ「イスラーム教徒の生活文化」VTR（講師：河田尚子氏） 7月25日（水）①講演Ⅱ「上座部仏教と生活文化」 講師：酒井教雄氏（学校法人佼成学園顧問） ②歌練習
-------	---

	7月26日（木）①講演Ⅲ「ヒンドゥー教徒とタミル人の生活文化」 講師：仲野省吾氏（公益財団法人 庭野平和財団） ②歌練習
--	---

報告事項：	・スリランカのムスリム、キリスト教徒、タミル人、シンハラ人の女生徒各2名の計8名と、本校生徒16名。スリランカの生徒一人に対し、本校の生徒2名一組がホームステイ。 ・行程2日目にホストとなるスリランカの生徒と合流し（引率保護者2名）、行動をともにすることで交流をはかった。（使用言語は英語） ・古都アヌラダプラの仏教寺院や、ヒンドゥー教寺院に参詣し、日本とは異なる信仰のあり方について理解を深めることができた。また、行程が「※ポヤデイ」というスリランカの祝日にもあたり、参詣する大勢の仏教徒の姿を見ることで、生活にいかん宗教が根付いているかを知ることができた。 ・世界遺産であるシギリヤでは要塞化した岩山の上の王宮遺跡に登り、スリランカの歴史を学ぶとともに、現地の人々の同地への関心の高さを肌で感じる事ができた。また、入場料が外国人と国民では大きな開きがあり、入口も別であるなど、現地にいかなければ分からない国内状況も知ることができた。（ツーリストは30ドル（約3300円）、同国人は50ルピー（約30円）、その差110倍） ・本校の生徒達は、ホスト宅で過ごすことで、スリランカでの日常生活の一端に触れることができ、異文化を理解することの大切さを学ぶことができた。 ※スリランカの祝日。各月の満月の日。仏教由来で寺院に参詣し満月を祝う。
-------	---

行程

日	主な内容
8月23日（木）	9:00 成田空港集合（13:00 搭乗） 18:00(現地時間) スリランカ到着 ホテル泊（ネゴンボ）
8月24日（金）	9:00 ホテルでホストスチューデントと合流 ＊バス移動：バス内で生徒同士交流 11:00 プンチーカタラガマ（ヒンドゥー教寺院）見学 16:30 イスラムニア精舎（仏教寺院）見学 ホテル泊（アヌラダプラ）
8月25日（土）	9:00 ホテル出発 10:50 サリーショップ 13:15 シギリヤ到着 ・シギリヤ博物館見学 ・シギリヤ登山（ポヤデイ、土曜日、夏休みという条件が重なり混雑。下山まで4時間を要した） ホテル泊（シギリヤ）
8月26日（日）	11:30 ピンナラワ着（像の孤児院見学） 16:30 立正校成会スリランカ教会到着 歓迎会（ 来賓：在スリランカ日本国大使館 八木浩治 参事官 高岡正樹 一等書記官 ）

	食事会（ホストファミリーを招待） 20:30 ホストファミリー宅へ 各ホストファミリー宅泊（コロンボ）
8月27日（月）	（終日）ホストファミリーと過ごす 各ホストファミリー宅泊（コロンボ）
8月28日（火）	14:00 生徒がホームステイからホテルへ ＊ホストファミリーと分かれる 15:50 ヴィサカ高校の生徒・先生と合流 9月に短期研修に来校（その時は予定）の生徒と交流会 会食（19:00 お別れ） ホテル泊（コロンボ）
8月29日（水）	8:30 講話：スリランカについて（講師：高岡一等書記官） 15:30 スリランカ空港
8月30日（木）	8:00 成田空港 税関通過後解散



生徒アンケート

(「しおり」の感想欄より抜粋)

- ・ホームステイを通し、自分なりに英語で会話する努力をしたが、初めて外国の人とコミュニケーションをとる楽しさを知り、満足感や充実感が得られました。
- ・この交流会に参加して本当によかったと思う。とても楽しかったしワールドワイドな視野を持つことができました。
- ・普段あまり考えなかった宗教について、深く考えるようになりました。現地で「宗教は？」とか「神様は？」と聞かれるたびに自分の（日本の）宗教はなんだろうと疑問に思いました。
- ・日本では絶対に味わうことの出来ない異文化体験が出来た。街のいたるところに安置されている仏像がまるでふざけているのではないかと思ってしまうほど派手だったり、衣装のサリーの色の派手さだったり、行ってみなければわからなかったことがたくさん知ることが出来た。
- ・日本とスリランカの関係について大使館の高岡さんの話を聞いて多くを学ぶことが出来ました。初めての海外だったので驚きや学び、そして日本と違う点がたくさんあり、満足感でいっぱいです。
- ・宗教については日本とは比べられないほど信仰する気持ちが強いと感じた。日本人に対し大変フレンドリーで気楽に話しかけてくれてとてもうれしかった。
- ・今回の交流プログラムに参加していなかったら、一生スリランカに行くことはないと思いました。実際に行ってその素晴らしさがわかり、自分の足で行って自分の目で見なければ本当のことはわからないと思いました。
- ・私の英語力が至らなかったからだけれど、現地の人たちは大きな声で、ゆっくり身振り手振りで話してくれてとても感動しました。
- ・ホームステイでお世話になったお家がイスラーム教徒だったが、1日3回のお祈りの時間をきちんと執り行い、その信仰心の深さに驚いた。
- ・ホストファミリーのみんなが本当に優しくしてくれて、1週間充実したステイが出来ました。学校の先生方をはじめ関わってくださった全ての皆様に感謝します。

成果と課題

近年まで深刻な内戦をしていたシンハラ人とタミル人の子供たちが本校の生徒たちと、同じ行程で寝食を共にし、良好なコミュニケーションをとることができた。これは若い世代が、民族や宗教をこえて交流し、互いの良い面を知ることができたと言う意味で評価できる。本校の生徒達は、日本とは異なる社会に触れることで、そもそも多民族社会とはどのようなものであるか学ぶ端緒にもなっている。

また、帰国前に、在スリランカ大使館一等書記官から特別講話をしていただくことで、今回体験できなかった同国の知識を補うこともできた。

ただし、今回ホストを引き受けてくれた家（8家庭）のうち半数近くが、家にメイドを雇っていると聞いた。さらに一つのタミル人の家は、普段から全員英語で暮らしており、タミル語を一切話さない（意味も分からない）というホストだった。女子生徒をホームステイさせる関係上、ホストファミリーの生活環境が一定以上の家になるのはやむを得ないと思う。

しかし、ホテルに泊まって世界遺産を巡り、スリランカの上流家庭にホームステイするこのプログラムは、事前研修でよく「カースト（身分や階級）」の説明をした上で、お世話になる家は裕福な家庭であることを理解させてからでないと、かえってスリランカという国を誤解させてしま

う可能性がある。実際に一人の生徒は、「スリランカはもっと大変な国だと思っていた」という感想を述べていた。

訪問するたびに目を見張るような発展を遂げているスリランカであるが、華やかな部分だけを見るのではなく、この国の抱える問題は何なのかをもっと深く考えさせるような内容を取り入れることが、同プログラムを更に発展させるために必要であると感じている。

2. VISAKHA VIDYALAYA と本校との相互交流

Visakha Vidyalaya はスリランカにある仏教を基盤とした伝統ある女子高校（以下ヴィサカ校）である。沿革については以下に記す。本校とは平成 30 年度に姉妹校提携を結び、本年度より相互交流を始めることになった。9 月にヴィサカ校の学生が本校を訪問し、本校の生徒が 3 月 8 日～16 日にヴィサカ校を訪問し、相互交流を実施することになった。

ヴィサカ校沿革 <http://www.visakhav.org/>

Founded in 1917 by a great Philanthropist Mrs Jeremias Dias of Panadura as a seat of learning for Buddhist Girls in Ceylon at a time when there was a huge hiatus for such institutions, it was named "Buddhist Girls' College" and begun in a house called "The Firs" in Turret Road, Colombo. Soon relocated at its present premises at Vajira Road it was named Visakha Vidyalaya after that noble lady Visakha of Lord Buddha's time by Lady Stanley the wife of the then Governor of Ceylon.

Visakha has long been recognized as being the premier girls' school in the Island. This meteoric rise within a relatively short period of time was achieved through the conscientious and dedicated work of a long line of Principals, Managers, Staff and Old Girls.

- 留学生受け入れ期間：平成 30 年 9 月 8 日～9 月 15 日
- 留学生（人数）：4 名 + 引率教員（1 名）15 歳 1 名 16 歳 2 名 17 歳 1 名
- 目的：両校の異文化交流
- 受け入れ時スケジュール

	10日(月)	11日(火)	12日(水)	13日(木)	14日(金)
H.R	上記参照	ホームルーム教室	ホームルーム教室	グローバルセンター	ホームルーム教室
1時限	スクールツアー	1E 英語コミュ	図書館	終日観光	1A 現代文
2時限	家庭科 2C/2D	体育 1E	中3 総合英語		2ASG 英会話
3時限	家庭科2C/2D	図書館	中 3-2 音楽		美術
4時限	観光 明治神宮 等	日本語の授業 (図書館で)	中 3-2 茶道		美術
昼休み		各教室で	各教室で		各教室で
5時限		1ASG 英会話	図書館		中1-1 読書作文 (図書館で)
6時限		グローバルで自習	LHR (各HR教室)		図書館

【スリランカの学生が最後に行った英語でのスピーチの内容】

「日本に来る前、日本はとてもきれいで美しい国だと聞いていましたが、実際に本当にきれいで美しい国でした。日本に到着する前はとても緊張していたけれどホストファミリーはとても親切ですぐに安心することができました。佼成学園ではすれ違う多くの生徒さんが笑顔で挨拶をしてくれ、「ごめんなさい」「すみません」などの言葉をいつも耳にしました。本当に佼成の生徒さんは礼儀正しく、自立されていて素晴らしいと思いました。私はスリランカの文化を授業でプレゼンをさせてもらいましたが、佼成の生徒さんと共有できたことがとても嬉しかったです。これらの経験は決して忘れません。皆さんに大変感謝しております。」

【所感】

今回のヴィサカ校の学生の受け入れの際、中学1クラス高校3クラスのHRに入ることにより、全校の多くの生徒が交流の機会を持つ事ができた。時間割も1クラスだけでなく、様々なクラスで授業を受けられるように体制を整えた。今後想定される日本の社会では異文化を尊重し受け入れるマインドセットが重要であるといえる。今回の交流を通じて互いの文化を尊重する大切さを多くの生徒が学べたのではないと思う。



調理実習の様子



日本文化交流（書道の様子）

（第5部文責：宮川典子、秋田聡大、浦田さゆり、片桐正雄、崎山隆則、須賀好美、三浦利紗）